

時代区分の経済理論

（第79巻第6号，1957年，415-430頁）

堀江英一*

【解題】資本主義の発展史を時代区分するために、各段階の社会を資本主義的な要素と資本主義以外の諸要素とで構成される統一体として把握すべきことを提起した。資本主義の歴史的な発展理論と、資本主義の現状分析としての構造理論とは別のものであることを明らかにし、この視点からマルクス主義の古典文献の整理をおこなった。これらは、大塚史学や講座派の理論に対する批判を含蓄しており、その先駆的なものである。高度成長が始まったばかりの1957年という早い時期に、日本経済史研究において工業化を中心とした発展理論を造る必要性を提起した。

I 時代区分論の歴史

日本における近代社会の発展を科学的にハッキリ規定しようとする動きは『日本資本主義発展史講座』の一冊となっている服部之総氏の昭和8年の論文『明治維新の革命及び反革命』（現在は『服部之総著作集』①に収録されている）にはじまるといえるであろう。服部氏はこの論文でいわゆる『幕末維新厳マニユ段階説』をたてて日本における近代社会の発展の時代区分論の出発点をつくったが、さらに昭和一二年には信夫清三郎氏と共著で『日本マニユファクチュア史論』と『明治染織経済史』を出版して（現在は『服部之総著作集』②に収録）、『幕末維新厳マニユ説』を経済史的に実証する努力をつづけるとともに、マニユファクチュア段階から工場段階への移行（産業革命）をあきらかにしようとした。そして戦後になってから、現在の『服部之総著作集』⑦に収録されている諸論文のな

かで、日本における帝国主義の成立と解体との過程の解明に努めている。こうしてみると、服部之総氏の多面的な研究活動は日本における近代社会の発展を時代区分する問題を一つの中心としていたのである。

ところが、戦後のわが国の歴史学界はいまいった服部之総氏的な問題意識から次第に遠ざかっていった。それは経済史的側面でもそうであった。服部之総氏の時代区分論の基軸が経済史的発展におかれているのはいうまでもないが、服部氏のいう経済史的発展は講座派的な農業停滞論と服部氏独自の非講座派的な工業発展論との合成からなっている。戦後のわが国の経済史学界が次第に農村経済史とくに農業史につきすすんでゆくにつれて——いわゆる「農業モンロー」主義がつよくなるにつれて、当然のことながら、服部氏がもっていた講座派的な農業停滞論がつよくなってしまっただけで、その時代区分論をささえていた工業発展論をきりすててしまう結果になってしまった。そればかりではない。「国民的歴史学」がいわれるようになってからは、経済史的研究そのものが軽視されて、

* ほりえ えいいち（1913-1981）。1947年助教授、48年教授。経済史。1976年退職。

経済的基礎をはなれた——だが実際は農業停滞論を基礎にした奇妙な——階級闘争論または政治闘争論が支配するようになった。それも当然であった。服部之総氏の経済史研究は階級闘争または政治闘争の発展を可能にし現実化する経済的基礎過程の分析であったが、経済史的研究が「農業モンロー主義」におちいったとき、それは服部氏のときにもっていた威力を完全にうしなってしまったからである。

こうしてわが国の戦後の歴史学界は服部之総氏が開拓した時代区分論を四分五裂させてしまった——経済史と政治史とを分裂させ、経済史のなかでは農業史と工業史とを分裂させてしまった。「国民的歴史学」の時代はわたしたち歴史学者の意識を政治的にたかめはしたが、科学としての歴史学を前進させはしなかった。わたしの昭和二九年の著書『明治維新の社会構造』は当時の水準にたって分裂していたものを再統一しようとする努力であった。

昨年になって、日本の歴史学界はあたらしい動向をしめしはじめた。昨年度の歴史学研究会および日本史研究会の両大会は時代区分の問題をとりあげ、ともに幕末期および日清・日露戦争期の段階規定に関する報告が行われた。わたし自身それらに関係した一人として責任をわかたねばならないのであるが、正直なところ、それらの報告はテーマの名称がちがっているだけでその内容は旧来通りであって、時代区分の問題を真正面からとりあげているとは到底いえない。これはおそらく報告者自身がもっている感想でもあろうから、こういったからといって、お叱りをうけることもなかろう。要するに、昨年度のわが歴史学界は、「国民的歴史学」の時代に分裂したものを統一することに——新しい成果を統一し服部之総氏の時代区分論をこえることに失敗したのである。

この失敗をみて、性急なひとびと——そしてこの失敗に責任をもつべきひとびとが、時代区分の問題をとりあげたこと自体を非難したが、

これらのひとびとは完全にまちがっている。歴史学が社会の発展を研究対象とするかぎり、社会の発展を時代区分することは歴史学の当然の任務であり、だから時代区分の問題は歴史学がそれをめぐって展開する一つの重心であったし、またこれからもそうであろう。だから、わたしたちは時代区分の問題をとりあげたことを非難すべきでなく、よろこぶべきであった。そしてわたしたちは、それにもかかわらず、その解決を前進させることができなかつた失敗の理由——失敗の原因がどこにあったかを、さがすべきである。

II 時代区分論の構成要素

さて、時代区分論の構成要素というべきものをさがしてみよう。昨年度のわが歴史学界の失敗の理由をあきらかにするためにも、まずこの点からあきらかにするのが便利であろう。

問題をハッキリさせるために、さきにいった服部之総氏の『幕末維新厳マニユ説』をとってみよう。その構成要素はこうなっている——

〔1〕 幕末維新の歴史過程は絶対主義天皇制の形成過程である——政治史的規定。

〔2〕 絶対主義天皇制の形成は幕藩領主的諸階級と草莽の志士に代表されるブルジョア諸階級などとの複雑な階級闘争の歴史的産物である——階級闘争の規定。

〔3〕 こうした絶対主義天皇制に結果する階級闘争を規定するものが服部氏の『幕末維新厳マニユ説』という経済的規定であった——経済史的規定。

わたしはいま『幕末維新厳マニユ説』の正否を検討しているのではなく、その形式的側面——構成要素をみているのである。服部氏の有名な『幕末維新厳マニユ説』はいまかぞえあげた政治史的規定・階級闘争の規定（このなかにイデオロギーをいれてもよからう）・経済史的規定の三つの構成要素のいまいったような有機

的統一であった。わたしたちがもとめている時代区分もそうした統一でなければならない。「国民的歴史学」の時代の経済史研究はこの階級闘争の規定をぬかして、経済史の規定で直接に政治史的過程を規定してしまった——いわゆる経済決定論になってしまったし、また「国民的歴史学」者は階級闘争だけをぬきだしてそれだけを強調し、またそれだけで政治史的過程を規定してしまった——政治主義におちいってしまった。こうして服部氏の時代区分論がもっていた統一性は寸断されてしまった。これは一つには戦争が、そのもとの弾圧がわたしたちのゼネレーションにもたらした視野の狭隘さがもたらした悲劇ともいえるし、またわたしたちの思惟の脆弱さの反映ともいえるであろう。そして昨年度のわが歴史学界は、近世史・近代史に関するかぎり——ほかの分野のことはわたしにはわからないのであるが、この統一に成功したとはいえないのである。さきにすすむことにしよう。

いまいったように、時代区分論は政治史の規定と階級闘争の規定と経済史の規定との有機的な統一であるが、この統一のなかで基礎となっているものは経済史の規定である。服部之総氏の幕末維新の時代規定がとくに『厳マニユ説』とよびならわされているのもこのためである。経済史の規定は時代区分の基礎規定である。もっともこういったからといって、相似した経済的条件があれば、かならず相似た政治的過程がおこるとはかぎらない。こういうことをいうのはさきに述べた経済決定論である。ある時代の階級闘争の内容はその時代の経済的条件によってあたえられるにしても、その階級闘争の具体的な姿は経験の集積の仕方や意識の発展の仕方、さらに戦略戦術の立て方によってかわってくるのであって、したがって相似た経済的条件のもとでも異なった政治的結果がでてくることがある。これはわれわれが日々経験していることである。それにしても、経済史の規定がそ

の時代の階級闘争を規定しそれに内容をあたえ、それを媒介として政治史的過程を規定しているのである。昨年度のせつかくの時代区分に関する論議が実のないものに終わった最大の原因は時代区分論の基礎的な構成要素である経済史の規定の再検討をゆるがせにしたこと——戦後の経済史の実証の成果の吸収とその統一とについての関心がうすかったことである。わたしたちは、経済史上の実証成果を吸収してこれまでの支配的見解を再検討して経済史の規定を確立し、それをふまえたうえで、これまでの階級闘争や政治史に関するいろいろの見解と対決しなければならなかったのである。

わたしたちが服部之総氏の時代区分論に帰るにしても、それを克服して前進するにしても、わたしたちはこれだけのことは知っておかねばならなかったのである。

Ⅲ 経済史の規定

ところで、時代区分をきめる基礎となっている経済史の規定がこれまた多様な構成要素からなっている。一つの時代の経済は単純な単一の内容からなるものでなく、多様な要素からなっている。レーニンが分析した19世紀末および20世紀初頭の経済を例にあげてみよう。

19世紀末および20世紀初頭のロシアでは、すでに資本主義的生産様式が支配的であり、その内部矛盾がつぎの社会主義を可能にする程に達していると、レーニンは考えた。だが、レーニンはその資本主義的生産様式を決して単純化しなかった。当時のロシアの資本主義的生産様式では、機械制大産業が支配的であったが、そのほかに、工業ではマニファクチュアおよび資本主義的家内労働・小営業・手工業・農村家内工業が広汎に残存しており、農業では資本主義的大農場経営・富農経営ばかりでなく中農経営・貧農経営も多いということを、レーニンは実証した。

レーニンはこうした多様な資本主義的諸要素の存在を実証したばかりでなく、中世的な・封建的な諸要素の残存を忘れはしなかった。農奴制度からの直接的な残存物である雇役制度とか共同体的諸慣習についても詳しく説明している。

わたしたちは、工場段階といえはすぐそれを単純化してそれ以外の諸要素を捨象して考えるわるいくせをもっているが、レーニンが19世紀末および20世紀初頭のロシア経済を工場段階と時代区分したとき、それはそんな単純なものではなかった。当時のロシア経済は、工場生産を支配的要素としていたが、なおそれにいたる過渡的・中間的な資本主義的諸要素と中世的・封建的諸要素からもなっていたのである。当時のロシア経済はこうした多くの要素の複合体であり、それらの統一体であった。革命的科学者レーニンは、実際の階級闘争を指導して革命という政治的实践を達成するためには、いまいったような複雑な経済的諸要素——したがって複雑な階級的利害関係を熟慮しないわけにいかなかったのである。

こうしたことは、工場段階ばかりでなく、すべての時代区分にあてはまる。マルクスは『資本論』のなかで「マニュファクチュアは、社会的生産をその全範囲において捉えることも、その深部において変革することもできなかった。マニュファクチュアは、都市手工業と農村家内工業との広汎な基礎のうえに、経済的作品としてそびえ立った」(青木文庫版第3冊609ページ・岩波文庫版第3冊103ページ)と述べているが、ここでマルクスはマニュファクチュア段階の複雑な内容を示唆している。レーニンは、1919年3月19日にロシア共産党第8回大会での『党綱領にかんする報告』のなかで、帝国主義段階を純粋な金融資本主義に単純化するブハーリンに反対して、「帝国主義は資本主義の上部構造である」といった(『レーニン二巻選集』第10分冊195ページ)。ここにいう「上部構造」

は、唯物史観にいう「上部構造」ではなくて、広汎な資本主義的諸要素のうえにそびえたつ「経済的作品」であるという意味である。

わたしたちは、いままで、時代区分をきめる基礎となっている経済史的規定を行う場合、ブハーリン的単純化の間違をおかしてきたのではないかと思われる。講座派系統のひとつとは封建的方向への単純化につとめてきたし、労農派系統のひとつとはブルジョア的方向への単純化に骨折ってきた。だが、こうした単純化のために、かえってたとえば幕末維新期の複雑な階級闘争の理解がさまたげられ、政治史的過程を理解することを不可能にしてしまったのであるまいか。

こんなことはわたしが今更いわなくてもわかりきったことである。だが、わかりきったことがわかっていないときには、結果はおそろしいものになってくる。昨年度のわが国の時代区分の論議は経済史的規定をぬかしたが、そのために必然的にそれがもつ複雑さの問題をぬかしたし、したがって当然階級闘争がもつ具体的な複雑な内容を単純化してしまった。単純化——それはわが国の社会科学一般がもつおそろしい病気である。

IV 時代区分の経済理論

話しがここまでくると、歴史学は経済学に接触してくる——歴史学はその問題解決を経済学にゆだねなければならなくなる。これはいままで説明してきたことから当然である——

〔1〕 資本主義の発展段階論——資本主義の発展段階は普通小営業段階・マニュファクチュア段階・工場段階・帝国主義段階と四分されるが、これらの発展順列およびその段階の内容は経済学の研究対象である。

〔2〕 これらの発展順列は資本主義の発展順列——資本主義経済だけをとりだ(抽象)してそのなかだけで考えた発展順列であって、資本

主義以外の諸要素は捨象されている。だから、わたしたちが現実的な時代区分を行うためには、わたしたちは捨象した諸要素——資本主義以外の諸要素やその段階を規定する要素(工場段階の工場のような)以外の資本主義的諸要素を復元して、多様な要素から構成された統一体としての段階を規定しなければならないが、それも経済学の課題である。

歴史学がおかしてきた単純化の間違いとは、わたしたちがいまいった〔1〕のことだけしか考えなかったことであり、〔2〕の点を十分に理論的に熟慮しなかったことである。だからまた、歴史学者の時代区分論のしくじりの大半の責任は経済学者がおわねばならないともいえるであろう。

そこで、わたしはマルクス主義経済学の古典がこの問題をどのように解決してきたかをデッサンしてみよう。

わたしたちがマルクス主義経済学の最も重要な文献、古典のなかの古典をあげるとすれば、それはつぎの三つになるであろう——

マルクス『資本論』(1867-95年)

レーニン『ロシアにおける資本主義の発展』(1899年)

レーニン『帝国主義論』(1917年)

これらの三つの著書はそれぞれマルクス主義経済学の発展段階の画期をつくっている。

これらの三つの著書はそれらがすべて「現状分析」であるという点では全く共通している。

『資本論』はその当時の最も成熟した資本主義国——19世紀中葉のイギリスを例証としそれを一般化した「現状分析」である。『発展』は19世紀末葉の後進国ロシアの資本主義経済の「現状分析」であり、そして『帝国主義論』は第一次世界大戦期の世界帝国主義の「現状分析」である。マルクスとレーニンにとって、これらの著書がプロレタリア党の政策をつくるための基礎理論であるからには、それらは「現状分析」でなければならなかった。

このように、三つの著書はひとしく「現状分析」である。だがしかし、それらはいまいったように異なった「現状」の経済学的研究であり、したがってまた異なった「現状」に応じて研究方法を発展させていった。マルクス主義経済学は、『資本論』の方法を発展させて異なった「現状」に対する研究武器たらしめることによって、その内容をゆたかにしていったのである。だから、わたしたちはこの研究方法の発展をみて『資本論』が「現状分析」でなく「原理論」などであるということとはできない。わたしはここでマルクス主義経済学における研究方法の発展を説明しよう。

『資本論』はイギリスをモデルとして19世紀中葉の成熟した資本主義社会の階級構成をあきらかにしようとした。これは『資本論』全三部の結論にあたる第3部52章『階級』のなかの次の文章から確証できる——

「労賃、利潤および地代を各自の収入源泉とする、単なる労働力の所有者、資本の所有者、および土地所有者、つまり賃労働者、資本家および土地所有者は資本制度的生産様式にもとづく近代的社会の三大階級をなす。

「イギリスでは、経済的編制からみた近代社会が最も広汎・最も典型的に発展していることは争うべくもない。とはいえ、この国ですら、この階級的編制は純粋には現われない。この国でも……中間=および過渡的諸段階が、いたるところで限界諸規定を隠蔽している。だが、これは吾々の考察にとってはどうでもよい」(『資本論』青木文庫版13冊1245ページ・岩波文庫版12冊452ページ)。

そうだとすれば、『資本論』であきらかにされたのは、19世紀中葉のイギリス社会の複雑な階級構成から中間および過渡諸段階を捨象した成熟しきった「純粋」資本主義社会の階級構成であった。そこにあきらかにされているのは「現状」

そのものでなく「現状」からの抽象ではあるが、それはそれとして、基本的な「現状」であった。

『資本論』はこうした階級構成をあきらかにするために、直接には、発生史的方法でなく構造論的または解剖学的方法を採用した。それはいってみれば、畠からとってきた玉葱の皮を一枚一枚はがして構成要素に分解し、今度は逆に芯から一枚一枚ずつ元通りの玉葱を構成してゆくといった方法であって、そうすることによって玉葱の構造はあきらかとなる。『資本論』の叙述は、はじめに分解された構成要素を次第に組み立ててはじめての玉葱を復元する過程である。だから、『資本論』第一部で述べられている商品と貨幣(単純商品経済)・資本による賃労働の搾取(絶体的剰余価値の生産)・協業→分業→機械(相対的剰余価値の生産)……などは、直接には、資本主義の発展をしめしているのではなく、前提した資本主義のそれぞれの断面——側面である。たとえば、資本主義的工場から機械を捨象すれば分業が残り、分業からそれを捨象すれば協業が、協業を捨象すれば単なる資本の賃労働搾取だけが残り、そして最後に資本主義的搾取を捨象すれば単純商品経済がのこる。こうしていまいったように分解した要素はそれはすべて工場というものの構成要素であって、それ以外のものでありえない。『資本論』はそれを逆の順序に——最も単純な・最も抽象的な要素たる商品から順次に工場を構成し復元しているのである。わたしたちは、『資本論』の叙述を、まずもってさきにいったような階級構成についての構造理論と理解しなければならぬ。

だが、『資本論』の第一部にかぎっていえば(第2部・第3部ではあてはまらない)、その叙述の一步一步が正確に資本主義の発生・発展・没落の過程をあらわしている。資本主義は単純商品経済を前提しそこから生まれてくるが、それは最初は親方が少数の賃労働者を搾取し(絶体的剰余価値の生産はそれだけで成立する)、さらに時折協業をするという形態をとり、つぎに分

業さらに機械を採用してくる(相対的剰余価値の生産)。このようにして、『資本論』の構造法則は同時に発展段階を——資本主義の発展法則をあらわしている。『資本論』を「原理論」とみるひとびとは、それが「現状分析」でないばかりか発展理論でないと主張しているが、それは『資本論』の完全な誤解である。その証拠には、それらのひとびとが発展段階として展開している経済政策論は『資本論』の発展段階論の借り物ではないか。マルクスのいったことを黙殺しておいて、それを俺がはじめていったことだと主張するマルクス主義者を、わたしたちはマルクス主義者とみとめていいものだろうか。それはとにかくとして、『資本論』の構造理論は、その第一部に関するかぎり、同時に発展理論をあらわしている。だが、『資本論』の発展理論——発展段階論は資本主義の、資本主義だけの発展段階論であった。それははじめから運命づけられている。なぜかといえば、『資本論』が、さきにいったように、直接には、純粋な資本主義の構造理論であるからには、その発展理論は資本主義の構造要素となっていないものをあらわしようがない。わたしたちは普通資本主義の発展を時代区分するとき、いまいった『資本論』の発展段階論をつかうが、このことを往々忘れがちである。それを忘れたとき、さきの単純化病がうまれる。

だが、いまいったような資本主義の発展段階論はそのままでは歴史家が要求する時代区分論にはならない。たとえば、単純商品経済は資本主義発展の第一段階であるが、その単純商品生産者は同時に農奴であり封建的農民であって、しかも封建的農民としての性格がつよいことが多い。単純商品経済は封建的生産様式のなかで生まれたばかりの資本主義であり、それは封建社会の一ウクライドであるにすぎない。だから、いままで説明してきた資本主義の発展段階論はそれぞれの段階における封建的諸要素を復活してきて、その封建的生産様式を克服し排除

してゆく過程としてえがかれたとき、それは時代区分論となる。『資本論』はそれをいわゆる歴史的諸章——第1部24章・第3部の20・36・47章で果そうとしたのである。このようにして、マルクスは資本主義の構造理論を骨組とし、そこからひきだされた資本主義の発展段階論をもとにした時代区分論をたてようとした。

だから、『資本論』は、一方では三大階級からなる資本主義社会の階級構成＝「現状」の構造理論であるとともに、それが歴史的に形成される具体的過程の歴史理論である。

レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』は普通いう意味の「発展」をとりあつたものでなく、文字通りの「現状分析」である。レーニンがここで意図しているのは19世紀後半における「ヨーロッパのアジア」たるおくれたロシアの階級構成——そうした「現状」の「分析」であった。おくれたロシアの階級構成の説明がただしく「現状」をうつしだすためには、『発展』は、『資本論』のように「限界諸規定」だけでなく、工場とプロレタリアート・大農場と農業プロレタリアートなどの「限界諸規定」だけでなく、当時まだ龐大な存在であったそれへの中間的および過渡的諸段階を考慮しなければならなかった。イギリスをモデルとした『資本論』とロシアを対象とした『発展』は、この点で異なっている。

ところで、こうしたロシアの階級構成をあきらかにするにあたって、レーニンは『資本論』を発展理論または歴史理論として利用し、しかもそれをきわめて特種な仕方で行っている。

『資本論』における発展理論または歴史理論は、さきに説明したように、「限界諸規定」が歴史的に生長してくる時間的諸規定——時代区分の基礎となるような諸規定である。レーニンは単純商品生産(小営業)段階・マニュファクチュア段階・工場段階といったマルクスの規定をそのまま受けついでくる。そうしておいて、レーニンはそうした発展段階論をつぎのように利用す

る——

〔1〕 おおのこの発展段階の形態——たとえば小営業・マニュファクチュア・工場が19世紀後半のロシアに並存している。こうしてマルクスの発展段階論はロシア経済の多様性をあきらかにするために利用されている。

〔2〕 しかもこれらの形態は19世紀後半のロシアにおいて毎日々々小営業からマニュファクチュアへ、マニュファクチュアから工場へ発展しつつあるものとしてえがかれている。マルクスの発展段階論は時代区分論としてばかりでなく、工場段階という一段階に存在する多様な要素相互間の発展方向をしめすものとして利用されている。こうして、レーニンはロシアが日々資本主義化しつつあることを実証したのである。

このようにして、『発展』は、『資本論』の構造理論をそのまま前提し、その発展理論または歴史理論を時代区分論としてでなく19世紀後半のロシア経済の多様性とその発展方向をしめす理論として利用したのである。だが、そうしてあきらかにされた19世紀後半のロシア経済こそ、ロシアの工場段階の現実的にして具体的な姿であった。さきにいった『党綱領にかんする報告』のなかで、レーニンは帝国主義段階についてもこうした方法を適用すべきことを主張して、ブハーリンの単純化病に反対したのである。レーニンの『発展』は、いまいったような意味で、マルクスの時代区分論をさらに具体化し、時代区分論の内容と方法とを確定したといえるであろう。

レーニンは、いまいったような仕方でも、『資本論』の方法を発展させて19世紀後半のロシアの工場段階の内容をいわば重層的なものとして確定したのであるが、このレーニンの方法は資本主義の発展を具体的に時代区分するとき、わたしたちが採用すべき方法である。だから、わたしたちは小営業段階・マニュファクチュア段階もこの方法をつかってあきらかにしなければ

ならない。ソヴェートにおけるいわゆる時代区分論争 (*Zur Periodisierung des Feudalismus und Kapitalismus in der geschichtlichen Entwicklung der UdSSR* の中に一括独訳されている) のなかの、たとえばN・ドルジーニンの『ロシアにおける資本主義的諸関係の歴史の時代区分』(邦訳-報告は史学雑誌六一編一号・総括は歴史評論七三・七四号にある) は、わたしがいままで説明してきたような方法をあきらかにしてはいないが、封建的生産様式との関連において小営業・マニュファクチュア・工場といった資本主義の発展段階をあきらかにしようと努力している。そうすることによって、資本主義の発展段階論はその時代区分論にまで具体化される。

レーニンの『帝国主義論』は、かれの『発展』が『資本論』に対してもつ関係とちがった関係を、『資本論』に対してもっている。『発展』は、さきにも述べたように、『資本論』の内容をそのまま前提しそれを特殊な仕方で19世紀後半のロシアの工場段階に適用したのであるが、『帝国主義論』は『資本論』が予想しながらも前提しなかった新しい「現状」——帝国主義段階を研究しており、したがってそれは『資本論』が前提しなかった新しい要因、たとえば独占=独占利潤とか対外関係とか植民地関係とかいった要因を前提している。だが、それについてはここで説明しないこととしたい。

V 経済学から歴史学へ

わたしはここで資本主義発展の時代区分を具体的に提供するつもりはない。わたしはここではマルクスやレーニンがどのようにして経済学から資本主義の時代区分論にアプローチしていったかの方法を簡単に説明しようとしたのである。

この方法をハッキリさせることはわたし自身にとっても必要なことである。わたしはわたし

の周辺にかなり多くの経済学関係出身の歴史家と文学部出身の歴史家とをもっているが、経済学関係出身の歴史家諸君にはかれらの経済学の知識を歴史学の方に誘導しなければならないし、文学部出身の歴史家諸君の関心を経済学にむけなければならない。こうした場合、マルクス経済学の諸範疇は論理的・歴史的であるといったいままでの「スローガン」をいってみたいところで、問題は一步も前進しない。またソヴェートの『経済学教科書』以来流行しているような経済理論を歴史理論まがいのものに焼直して提供する安易な方法は頭脳の思惟能力を減退させる危険がありそうに思えてならない。わたしがいままでできる問題のただ一つの解決方法は、マルクス主義者が経済理論を時代区分論に誘導していった方法をあきらかにすることしかない。それが経済学を歴史学に誘導してゆく方法である。

わたしがいままで説明してきた誘導方法は三つの過程からなっている——

第一の過程——構造理論 『資本論』は一定の抽象をうけた基礎的な「現状」の「分析」であるが、『資本論』はこの「現状」を抽象的な「側面」の複合体としての具体的存在として構造的に再現しようとした。わたしたちは『資本論』を構造理論としてシッカリ把握しなければならない。構造理論を構造理論としてでなく、それを歴史にながしてよむ読み方は「現状」把握能力を減殺する。

第二の過程——発展段階論 『資本論』が「現状」を抽象的な「側面」の漸次的な統一過程として論理的に再現しようとする場合、それは一定の限度内で——その第一部に関するかぎりで、資本主義の、しかも資本主義だけの発展段階を表現している。だから、そうした意味で、『資本論』は歴史学の重要な指針となる。

第三の段階——時代区分論だが、こうした発展段階論はきわめて抽象的な理論であって、これを時代区分論と考えれば、とんでもない間違

であるし、かえって歴史を理解する道を封じてしまう。それは、まず第一にそれを圍繞している非資本主義的とくに封建的要素を捨象しているし、第二にそれぞれの段階におけるその段階規定以外の諸々の資本主義的要素(たとえば工場段階における工場以外の小営業・マニュファクチュアなど)を捨象している。一つの時代を具体的に規定するためにも、また革命的実践をあやまらないためにも、いまいった二つの種類の要素を導入しなければならないが、『資本論』は歴史的諸章でこれを試みている。だが、レーニンが、工場段階と帝国主義段階とでこの方法を完成した。経済理論を時代区分論に誘導する

方法はレーニンが完成した。のこる問題は小営業段階とマニュファクチュア段階とにレーニンの方法を適用して、それを定形化することである。さきにいったドルジーニンの論文はそれへの試みと考えるとよからう。

1957年4月稿

追記 わたしは近々青木書店から公刊される長谷部文雄・横山正之の両氏編『資本論の研究手法』(仮称)のなかで、この同じ問題を『資本論』第一部にかぎって具体的に述べた。参照されたい。